東洋経済
ACADEMIC

龍谷大学 特別編集版
SDGsに取り組む大学特集

龍谷大学が目指す持続可能な社会の実現

2019年7月25日発行『SDGsに取り組む大学特集』掲載

龍谷大学
RYUKOKU UNIVERSITY

大学は、持続可能な未来社会のために何ができるか。

「持続可能な開発目標=Sustainable Development Goals（SDGs）」。
国連によって掲げられた人類共通の目標が
世界に与えたインパクトは大きく、
政界や産業界、教育界における人々の思考・行動に変革が起きている。
日本の大学もその例外ではない。
未来を切り開くべく、
先導的な取り組みを始めた教育研究機関の現在に迫った。

経済発展や技術革新により物質的な豊かさがもたらされた一方で、地球環境の悪化や格差の拡大といった負の側面も生まれ、複雑かつ多様な課題が現代社会に山積している。我々は次代のために何ができるのか。人類のたどり着いた答えが、2015年9月の国連サミットで採択された「持続可能な開発目標=Sustainable Development Goals（SDGs）」だ。そこでは、世界のすべての人が普遍的に達成を目指すべき17のゴール・169のターゲットを明確化している。今やSDGsに基づいた意思決定は世界的な潮流といっても過言ではない。アカデミックの領域にもその波は押し寄せており、地域や分野を問わず世界中の大学でSDGsに向けたアクションが加速度的に進みつつある。地球規模のアジェンダに対する取り組みは大学の価値を測る新たな物差しになるとともに、国際通用性を高める一手にもなるだろう。「知」の創造を通して、変わり続ける社会の負託に応えるために。SDGsという未来へのロードマップが示された中で教育研究機関が果たすべき使命は限りなく大きい。

龍谷大学
RYUKOKU UNIVERSITY

RYUKOKU UNIVERSITY

仏教の精神とSDGsを結び「仏教SDGs」で持続可能な社会の実現を目指す

ＳＤＧｓの理念と一致する御仏の願い

各界でＳＤＧｓの実現に向けた動きが活発化する中、教育・研究機関として日本屈指の歴史と伝統を持つ龍谷大学は、独自の切り口で人類共通の課題に向き合おうとしている。キーワードとなるのが、「仏教ＳＤＧｓ」だ。入澤崇学長はこう語る。

「本学の建学の精神は浄土真宗の精神です。その中枢にある阿弥陀仏のはたらきを示す語に『摂取不捨』（すべての者をおさめとって見捨てない）という言葉があります。これはまさしくＳＤＧｓの理念『誰一人取り残さない』に通じるものです。そこから、仏教とＳＤＧｓとを結び付ける本学ならではのアプローチで、持続可能な社会の実現に貢献できるのではないかと考えました」

龍谷大学が従来から実施してきた全学部必修の「仏教の思想」は、仏教ＳＤＧｓの基盤となる科目だ。学生たちは、人間がいかに自己中心的で先入観や偏見を持っているかを徹底的に考え抜く。まさにＳＤＧｓの担い手に不可欠なマインドを養う科目と言えるだろう。ほかにも、法学部と理工学部（２０２０年４月先端理工学部開設予定、〈設置構想中〉）におけるＳＤＧｓを意識した教育プログラムの展開や、学生による社会貢献活動への支援制度、地方自治体・企業と連携した「龍谷ソーラーパーク」の設置、ＳＤＧｓをテーマとした生涯学習講座の実施など、多方面でその動きを加速させている。各活動の萌芽を発展させ、全学的にＳＤＧｓを推進していくにはネットワークが鍵になると入澤学長は熱を込めて話す。

「単発の取り組みで終わらせないためには、横串の通った推進体制を構築することが重要です。学部横断型のプロジェクトはもとより、龍谷総合学園という巨大な組織内、ひいては国境を越えた仏教系大学間での連携も視野に入れて準備を進めています。一昔前は、大学は俗世から離れて研究者が引きこもる象牙の塔と揶揄されていました。もはやその内向きさが通用する時代ではありません。産官学民が手を取り合う開かれた教育・研究活動が、持続可能な社会の実現を目指す現代では求められています」

「自省利他」を掲げて仏教ＳＤＧｓのさらなる推進へ

２０１９年に創立３８０周年を迎えた龍谷大学は、周年記念事業の基本コンセプトを「自省利他」と定めた。これは仏教の最も古い教えの１つで、自らの行いや属する集団を常に省みて、他者のために行動する精神を指す。次の長期計画においても指針になる言葉だという。

「昨今はキャリア教育の重要性が叫ばれていますが、就職するためだけの手段ではなく、社会の大局を見据えて豊かな考え方・生き方を学ぶことが真のキャリア教育だということを忘れてはなりません。学生には、自省利他を含め本学で学んだ仏教の思想を、知識としてしまい込まず、自分の人生で実践してほしいと願っています」

仏教の精神が息づくキャンパスでは、ＳＤＧｓにつながる学生主体の取り組みも活発に行われている。学生団体「チーム・ノーマライゼーション」はその一例だ。価値観が多様化する現代において精神的な悩みを抱えている学生も珍しくないが、挫折を経験してそれを乗り越えた者こそ、社会に目を向けて他者に寄り添うことができるようになると入澤学長は語る。

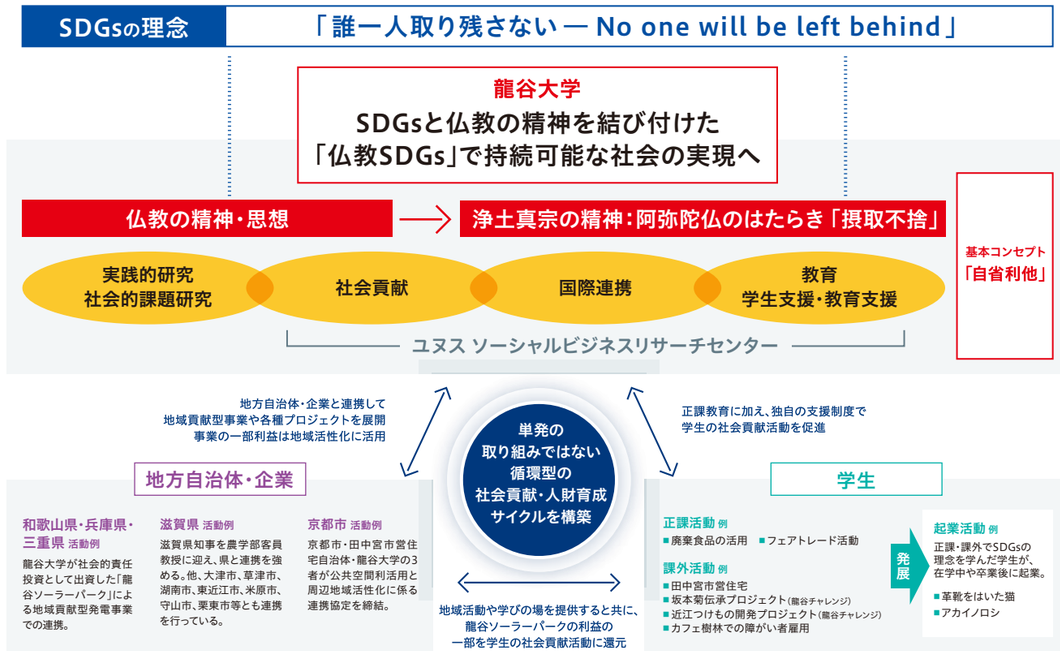
「『チーム・ノーマライゼーション』のメンバーには、かつていじめに苦しんだり、不登校だったりした者も多くいます。彼らは人生の辛い谷を越え、今は障がいのある学友の就労支援や生きがいづくりに励んでいます。この大学には、学生が他者の痛みや悲しみについて真剣に考え、お互いに支え合う土壌が培われていると強く感じます」

長期的なアジェンダであるＳＤＧｓの推進に向けて主役となるのは、次代を担う若い世代だ。仏教ＳＤＧｓが浸透する龍谷大学から輩出される人財が、「誰一人見捨てない」「誰一人取り残さない」社会の実現に向けて何をもたらすのか。その活躍に注目が集まる。

Irisawa Takashi
入澤 崇
第19代学長

1955年広島県因島生まれ。龍谷大学大学院文学研究科博士課程単位取得満期退学。専門は仏教文化学。1990年文学部仏教学科に着任。ベゼクリク石窟壁画の復元事業や数多くの仏教遺跡調査に従事。2004年から5年間アフガニスタン仏教遺跡学術調査隊の隊長を務める。龍谷ミュージアム館長、文学部長を経て、2017年4月に学長就任。

■ SDGs達成に向けた龍谷大学独自のエコシステム=複数の目標に「横串を刺す」ことで目標達成を目指す。



龍谷大学独自の取り組み

地域貢献型事業の推進や京都市・滋賀県との連携強化

「龍谷ソーラーパーク」は、太陽光発電による売電利益を地域の課題解決や学生の社会貢献活動に役立てる地域貢献型メガソーラーだ。事業主体は非営利型株式会社が担い、事業費は大学からの出資と金融機関からの融資で調達。龍谷大学はこれを社会的責任投資と位置付けており、社会変革を促す投資として注目されている。和歌山県印南町や三重県鈴鹿市での設置に続き、２０１７年９月には兵庫県洲本市で「龍谷フロートソーラーパーク洲本」を竣工した。ここでは維持管理の難しかった農業用ため池に大型ソーラーパネルを設置する手法が取られており、再生可能エネルギーの普及に加え、ため池の新たな維持管理モデルになることが期待されているという。また、政策学部のＰＢＬ科目「洲本プロジェクト」のフィールドとしても活用され、学生たちは地域の人々と協働しながら洲本市の活性化施策に取り組む。産官学金民が連携した革新的なメガソーラーが地域の明日を明るく照らす。

龍谷大学はＳＤＧｓを積極的に推進する地方自治体とのプロジェクトにも力を入れている。京都市と田中宮市営住宅自治会と連携協定を結び取り組んでいるのが、高齢化が進む団地の活性化だ。学生が公営住宅の空き家に住み、自治会活動に参加しながら地域の活性化を図る。学生ならではの感性やエネルギーが、地域社会に新しい風を吹き込んでいる。

２０１９年に開設30周年を迎えた瀬田学舎。龍谷大学は学舎がある滋賀県とも協力・連携を強めている。その一環として、同年４月からは三日月大造滋賀県知事が農学部の客員教授に就任した。特別講義や瀬田学舎開学30周年記念事業での対談などを通して、学生は行政の立場から見た農業を学ぶ。また、滋賀県で開催された「ＳＤＧｓ学生大会―びわ湖で考えるＳＤＧｓ―」には、農学部の大門研究室が参加。研究成果の発表や他大学の学生らとのワークショップに励んだ。コメの消費が減少する中、「水田」を「畑」として使う水田転換畑の活用に注目し、多様なマメ類の特性を生かした作付体系など、環境に優しい作物生産技術の研究に取り組んでいる。同研究室の取り組みは滋賀県のＳＤＧｓ活動支援事業補助金に採択されており、さらなる活動の拡大も見込まれている。

正課内外で学生の社会貢献活動を手厚く支援

国際学部グローバルスタディーズ学科の斎藤ゼミでは、発展途上国の生産者に適正な対価が支払われるように日々の購買活動を見直す考え方「フェアトレード」について学びを深めている。ＳＤＧｓの17の目標とも密接に結び付いたテーマで、ゼミ生は積極的にフェアトレードに関するイベントや関連商品を扱う企業に訪問し、生産者の現状や貿易のあり方について研究。得られた知見をゼミ外の学生と共有することで全学に波及させ、公正な取引を通じた持続可能な発展に貢献しようとしている。

ＳＤＧｓ達成に向けたアクションは正課内だけにとどまらない。前述した「龍谷ソーラーパーク」の利益の一部を用いて運営されているのが「龍谷チャレンジ」である。学生の正課外における地域と連携した社会貢献活動を支援する制度で、採択されれば活動費として最大30万円が支給される。各学部の学生が本制度を利用して多様な事業を進めており、「大津の伝統野菜『坂本菊』伝承プロジェクト」もその１つだ。坂本菊は香り高さが特長の食用菊だが、近年栽培農家の減少に伴い、絶滅の危機にさらされている。そこで、種の存続と発展のため、農学部の学生が農家・行政と協力して調理法の開発や試食会を実施。知名度の向上を目指し、今後はＳＮＳを利用した情報発信にも力を入れていくという。ほかにも、「近江つけもの」のブランディングや「近江かぶら」の商品開発など、地域の農作物を継承していくためにさまざまな活動が行われているが、重要なのはそのどれもが長期的視野に立ち、学生たちの手で粘り強く継続されているということだ。正課で学んだ知識や思想を正課外で実践し、困難を糧に自分自身を成長させながら社会に貢献していく若者たちの姿からは、無限の可能性が感じられる。

漬物グランプリ2019で「近江つけもの」を使用したレシピが受賞した様子

ノーマライゼーションを体現し、地域社会へ発信

深草キャンパスの中心に店舗を構える「カフェ樹林」。清潔で明るい店内では、障がいのある人たちが学生と協働して調理・接客業務をこなす。ランチや焼きたてパン、特製コーヒーが提供され、お昼時は利用客で溢れかえるほど。この人気カフェは学生団体「チーム・ノーマライゼーション」が運営主体の社会福祉法人と共に活動を行っており、障がい者の雇用創出に貢献している。障がい者を含む多様な人間が補い合い、生かし合って平等に暮らせる社会を目指す「ノーマライゼーション」をまさしく体現するシンボルと言えるだろう。

龍谷大学で学んだ学生の中には、在学中や卒業後にそれまでの経験を生かして起業する者も珍しくない。障がい者や引きこもりの若者が活躍できる靴磨き専門店「株式会社革靴をはいた猫」。タイの少数民族アカ族がつくるコーヒーの販売・価値普及を通して、持続可能な流通モデルの構築を目指す「株式会社アカイノロシ」。そのどれもが、仏教の精神やＳＤＧｓの理念に通じる、社会的意義の大きい事業活動を展開している。

仏教ＳＤＧｓを掲げ、循環型の社会貢献・人財育成サイクルを構築することで持続可能な社会の実現に寄与する龍谷大学。２０１９年に創立３８０周年を迎えた知の拠点は、輝かしい未来に向けて新たな一歩を踏み出した。

UNIVERSITY INFORMATION
RYUKOKU UNIVERSITY
龍谷大学
〒612-8577
京都府京都市伏見区深草塚本町67
URL：https://www.ryukoku.ac.jp

ユヌス ソーシャルビジネス リサーチセンターを 龍谷大学に設置

YUNUS Social Business Research Center
In RYUKOKU UNIVERSITY

ソーシャルビジネスとは

社会問題の解決をビジネスの手法を用いて行うこと。特徴は、事業の目的として「利益の追求」よりも「社会的課題の解決」に重きを置いていることである。社会的課題解決に向けての活動資源を寄付や行政からの助成だけでなく、ビジネスの手法を活用して自ら稼ぎ出し調達することに重点を置いている。株式会社、NPOなど幅広い担い手によって展開されている。

親和性が高い仏教SDGsとソーシャルビジネス

ムハマド・ユヌス博士と白石克孝副学長（SDGs担当）による会談を経て、2019年6月20日、ソーシャルビジネスに関する研究拠点「ユヌス ソーシャルビジネス リサーチセンター」が深草キャンパス内（京都市伏見区）に誕生した。社会貢献を大学の使命の1つとして掲げてきた龍谷大学は、仏教の観点で持続可能な社会を考える「仏教SDGs」を推進している。利益の追求ではなく、社会問題の解決を主目的とするソーシャルビジネスと親和性が高いことから、同センターの開設に至った。これにより、龍谷大学は74番目のユヌス ソーシャルビジネスセンターとしてグローバルなネットワークに加わり、その基盤を生かした幅広い連携活動を展開していくこととなる。白石副学長はこう語る。

「ユヌスセンターのあるバングラデシュでは国民の多くがイスラム教を信仰していますが、その根底には仏教に通じる『利他』の精神があります。宗教は違っても志を同じくする者同士で、あらゆる垣根を超えて知識や技術を分かち合い、より良い未来を創るためのアプローチを共に模索できると考えています」

龍谷大学は自省利他を基本コンセプトに創立380周年記念事業を展開しており、自省利他とソーシャルビジネスの関わりをテーマとして世界宗教フォーラムの開催を計画している。

地域連携事業の推進や次世代の起業家育成に尽力

今後、同センターでは仏教SDGsの研究および具現化を中心に、ソーシャルビジネスの地域実装化につながる活動を展開する構えだ。社会的責任投資と位置付ける地域貢献型メガソーラー発電事業「龍谷ソーラーパーク」をはじめとした種々の取り組みがすでに行われているが、こういった地域と連携した事業をより一層推進していく。中でも注力しようとしているのが、意欲あふれる若者たちの志を生かした事業に対する支援だ。知識・ノウハウ等のサポートを通し、社会貢献に資する次世代の起業家育成を目指すプログラムなども構想中だという。

目的の達成に向けては、何よりも多角的なつながりが欠かせない。そのため、同センターは産官学と地域の連携事業や生涯学習事業を行う「REC（龍谷エクステンションセンター）」に設置されている。学内の各部署や龍谷総合学園という学校グループはもちろん、市民・企業・行政など多様なステークホルダーと包括的な連携を図るうえで、格好の拠点になると言えるだろう。関西初、日本では2例目となる同センターの動向に国内外から大きな注目が集まっている。

白石 克孝
副学長（SDGs担当）

京都市長・門川大作氏からのコメント

「3つのゼロ」～貧困ゼロ、失業ゼロ、CO_2排出ゼロ～に向け、世界中で社会問題の解決に向けたソーシャル・イノベーションを実践し続けておられ、ノーベル平和賞もご受賞のムハンマド・ユヌス博士。私も、2度お会いしてじっくりとお話を伺う機会に恵まれ、深く感銘。SDGsの偉大な先駆者です。

そして、大学のまち・京都の誇りである龍谷大学は、1639年に僧侶養成機関「学寮」が西本願寺に創立されてから、今年で380周年！これを機に、他者との関係性を重んじ、他者の幸福に資することを考え行動する「自省利他」を、新たな哲学として社会に広く発信されます。

両者の連携により、教育や研究・調査、普及や新規のソーシャルビジネス事業者のインキュベーション機能を持つ世界的なネットワークの強化を目指されるお取り組みは、大学のまち、宗教都市、ソーシャル・イノベーションなど多様性と重層性を誇る京都ならでは！心強い限りです。

以下、少し長いですが、龍谷大の入澤学長の年頭のご挨拶を引用します。京都市もしっかり連携し、世界のさまざまな課題に対して、京都から創造的に挑戦を！共々に頑張りたいです。

“いま地球の悲鳴に耳をすませる活動が活発化してきています。2015年に国連で採択されたSDGs（Sustainable Development Goals）。貧困・飢餓・不平等など、17の諸課題を解決するための目標です。世界中でその実現に向けた動きが活発化してきています。わが国においても産業界を中心として動き始めています。いくつかの大学も本格始動しています。これは龍谷大学が率先しておこなうべきと私は判断しています。SDGsの理念は、「No one will be left behind」、つまり「誰ひとり取り残さない」というものです。浄土真宗では「摂取不捨」という言葉が大切にされています。4月からの学生手帳に冒頭の言葉として私は「不捨」（捨てない）を掲げることとしました。誰一人捨てないという「仏のこころ」、誰一人取り残さないという「SDGsの理念」を重ね合わせたい気持ちからです。産業界や行政と力を合わせ、龍谷大学ならではの切り口で、仏教SDGsに取り組んでいきたいと思っています。”

SDGs Front Runners

― SDGsの現場で活躍する龍谷大学生の取り組み一例 ―

かんきょうと

政策学部 深尾ゼミナール所属 3年
kyo 0 market中心実行メンバー

食品を無料提供する「もったいないスーパー」で食品ロスの削減に取り組む

写真右から：吉田 和志さん、古市 真歩さん、工藤 雅美さん、梶原 大誠さん

2019年6月22日に開催された第7回 Kyo 0 market開催の様子

私たちは京都の食品ロスをゼロ（0）にするため、地域密着型イベント「kyo 0 market」の企画・運営を行っています。ゼミ活動の中で、毎年膨大な量の食品がまだ食べられるのに廃棄されている現状を学び、学生としての立場から食品ロスの課題に取り組めないかと考えたことがプロジェクトの発端です。

チラシ掲示やポスティング、ラジオ放送、SNSなどで大学周辺やそれ以外の地域住民に呼びかけを実施し、当日は約70人が来場した。

成果	
回収食品数	154品（完売）
回収食品総重量	約24.4kg
廃棄されずに循環したエネルギー	約37,543kcal

活動の要となるのが、一般家庭で不要・廃棄予定となった賞味期限前の食品を寄付で集め、無料で提供する「もったいないスーパー」。2018年の始まりからこれまでに7回開催しましたが、循環できた総食品数は1208品、エネルギー換算では約31万7千kcalにも上ります。このほかにも、食品ロスで出たお茶を飲みながら、余剰食材の活用レシピを参加者と共に考える「エコカフェ」など、地域の皆さんを巻き込んだ多彩な催しを行っています。その結果、少しずつですが地域での認知度も上がり、さまざまな地域での活躍の場面をいただくようになりました。

私たちは企画の精査・改良を重ねながら、この活動が地域に根差し、住民の方々が自主的に食品ロス削減に取り組んでもらえるようになることを目指しています。目下の最優先課題は、イベントの認知向上と規模の拡大です。そのために、SDGsという共通言語を活用して行政や企業との連携も深め、活動の可能性を広げたいと考えています。

巻末付録

SDGsとは

SDGs（エスディージーズ）とは、「あらゆる形態の貧困に終止符を打ち、不平等と闘い、気候変動に対処しながら、誰も置き去りにしない」ことを掲げる“持続可能な開発目標”を指す。2030年までに達成すべき17のゴール・169のターゲットから成り、持続可能な社会の実現に向けた指針を明確に示している。教育機関と関連の深い目標に、ゴール4「質の高い教育をみんなに」がある。例えば大学は、立場の弱い人々や不利な条件に置かれている人々に学びの機会を提供することで達成に貢献できる。ゴール9「産業と技術革新の基盤をつくろう」に対しても、最先端の研究を展開する大学が担う役割は大きい。そして、行政や産業界との連携を推進してきた大学にとって、ゴール17「パートナーシップで目標を達成しよう」も必然的に関わってくる。重要なのは、これら17のゴールは不可分な関係にあるということ。だからこそ、大学の有する「総合知」が大きな意味を持ってくるのだ。

お問い合わせ先

RYUKOKU UNIVERSITY
龍谷大学

学長室（広報）
〒612-8577 京都市伏見区深草塚本町67
TEL：075-645-7882　FAX：075-645-8692
URL：https://www.ryukoku.ac.jp

東洋経済 ACADEMIC | SUSTAINABLE DEVELOPMENT GOALS